

あくまでも正義

Mild Blend

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暇をもて余した神々による戯れの物語。ヒーローに憧れた青年の死から始まる異世界転生、人体実験の被験者となったクロス・アモンが強大な力を得て正義を為す。

※厨二病と妄想癡を拗らせた自己満の俺TUEE二次小説です。趣味全開なので苦手な方や不快に感じる方はブラウザバックして下さい。

目次

00話	神々の悪戯	1
01話	アモンとデビデビの実	5

00話 神々の悪戯

これは暇をもて余した神々の一柱——ロキと、その悪友トリックスターの戯れにより運命を弄ばれた男の物語である。

黒須亜門、ロキに選ばれた不幸にして幸運な青年。

亜門は正義の味方に憧れて警察官となる。

しかし正義を行使するには、亜門はあまりにも弱すぎた。

正義を為す者にとって弱さは罪である。

崇高な志だけでは何も得られないし、自分すら護れない事を証明したに過ぎない。

それでも亜門に後悔はなく、自己犠牲によつて救われた人がいる事で満ちて逝く。

盤上の駒がひとりでに倒れ、ロキは静かに眉をひそめた。

「あーあ、やっぱり正義感だけじゃ即詰みか」

亜門の最期が何の意外性もなく、余りの呆気なさのため息をつく。天の邪鬼なロキは予想通りの展開を好まない。

虚弱な亜門が警察官になれたのは、他でもないロキの計らいだつた。

志だけは無駄に高い雑魚が警察組織の底辺からどこまで登れるか、そんな実験のお遊びに過ぎない。

「前の臆病者エリートはマフィアの首領の右腕までいったつてのに、亜門君にはもう少し頑張つて欲しかったよ」

「いやいや、ロキはん。そら無理ゲーいうやつですわ。最弱設定の亜門ちゃんを、いきなりラスボスに当ててるて……」

ガツカリだよと憤慨するロキを、とんがり帽子にハデな衣装と道化のような風体をしたトリックスターが宥める。

「君が言い出したんじゃないか、レベル1の裸装備でラスボスのダンジョンに入れてみたらつて」

「お茶目な冗談ですよん。ロキはんが王道は飽きたつて駄々こねるさ

かい。ワイは王道は王道で楽しめるよって、嫌いやないねんけどな」
「フフツ、僕だつて嫌いなわけじゃないよ。ただ君の余計な干渉さえなければ……もつと楽しめたと思うんだけど？」

「いやいやいや、亜門ちゃんの非力さと不運さは体質的なもんやし、正義感だけであないに暴走されたら、結局は遅かれ早かれでつせ。ワイはちよこつと環境と因果率をイジツただけですわ」

トリックスターは悪びれない笑みを浮かべており、ロキもそれに対してとやかに言う事はしない。

「これがいつものやりとりだからだ。」

「まあゲームオーバーなら仕方ないよね」

「何しろこい事言うてまんねん、すっかり亜門ちゃんの魂回収しとつたくせに」

「あつはつはつは、バレてたか。どうだいトリックスター、第二ラウンドは異世界ってのは？」

「……異世界って、まさか？」

ロキは意趣返しのようにニコニコ笑う。

「そう、そのまさかさ！」

「はあ……またワンピでつか？」

「うん、彼の正義感ピツタリだと思っただよ。前回のエリートマフィア君より期待出来そうだし」

「せやかて、前回は大失敗ですよ。こっちのマフィアでは出世しよつたけど、あつちやと三下もええとこやつたし、そもそも麦わら海賊団に無理矢理入れたんが間違いやつた」

「否定はしないよ、でも君も納得していたじゃないか。孤高を愛する者が、仲間を愛する者達の中で何を感じ、何を思い、どう生きるか。まあ、それなりに楽しめたよね？」

「……せやけど、結果は最悪やつたで。せつかくチートで膨大な知識量与えたつたのに、中途半端に原作知つとつたせいで早い段階から悪目立ちしてもうて、バスターコールでアボンや。知力活かして大人しゆう参謀でもやつとつたら良かったのに、あのアホンだら」

トリックスターは思い出しただけでも腹立たしいと愚痴った。

一方のロキはトリックスターほど悲観的には捉えていない。

「確かに前回はボクらの意向で縛りが多かったからね。でも制約がなかったら絶対裏切ってたと思うよ。まあ賢者と猛者のどちらが勝つかっていう賭けは君が勝ったんだから機嫌直しなよ。彼は自滅したに等しいけど、それは君の言う通り原作知識に影響された部分も大きい。だからさ、今回は原作に関わる記憶は完全にデリートしてしまおう。ワンピースの世界線はそのままコピーして、今度は亜門君を武力の権化として一石を投じてみる……ってのはどうだい？」

「……」

ブツブツ文句を言っていたトリックスターが黙り、耳だけが興味深げにピクピク動いている。

「それに君の好きな他のアニメキャラクターも、スポット的に登場させるとか面白いんじゃない？」

「……」

「あとは戦闘民族みたく死にかける度にパワーアップするとか、他人の技を見ただけでコピーできるとか、基本スペックは君に一任するからさ。ボクは最後にちよつとだけチューニングさせて貰えればいいよ。あつ、勿論君の承諾を得た上でね」

「……」

「おまけに今回は君が欲しがってた因子を、わざわざ魔界まで行って貰って来たんだよ。これで君の考えた悪魔の実が作れるんじゃないかい？ 気が進まないなら無しでも構わないよ。あとは所属先も未設定でどうかな？ どの勢力を選ぶかを当人に委ねてみるのも一興だ。どこを選んでも王道っぽくなると思わない？ どうかな？ どうかな!？」

「……む、むむ、むっはーッ！ 堪りまへんなあ、流石はロキはん！

ワイのツボをよう心得てますわ。異論はありまへんで、あとは——」

「だよね、だよね。流石はトリックスター、よく判ってる」

ロキとトリックスターの密談は長時間に及び、お互いに満足のいく方針と設定が出来たと祝杯を交わした。

「亜門君がこれまで貫いて頑張ってきた正義を、世界が変わっても貫けるか否か。転生したら亜門君はどんどん強くなって、世界最強だつて夢じゃない。そうなった時、果たして亜門君は強者としての業に耐えられるか、はたまた闇落ちするのか」

「海賊にしても、海軍にしても、矜持はあるやろしな。それは革命軍でも変わらんで」

「その通りさ。だからこそ亜門君の魂には予め“傲慢の種”を撒いておく。彼が無敵に近い力を持った後、どのタイミングで発芽するか、あるいは一生芽を出す事なく終わるのか……フフフツ、とても楽しみだよ。ちなみにボクは早い段階で発芽する方に賭けるけどね」

「……ロキはん、ハッピーエンドにさせる気ないやろ？」

「まさか、君が王道好きならば、僕はハッピーエンド好きだよ」

「ほ、ほんまかいな……」

「あつはつはつは、まあ楽しもうじゃないか。」

こうして黒須亜門はクロス・アモンとして、ワンピースの世界に転生する事が決まった。

本人の許可はなく、また何の交渉や説明もなく、ただただ暇をもて余した神々の歪な愉悦の為だけに、である。

01話 アモンとデビデビの実

俺はクロス・アモン、武闘家だ。

今年で十五になるが、十歳より以前の記憶はほとんどない。故郷はおろか両親の顔や、どうやって暮らしてきたかもサッパリだ。にも関わらず、なぜか自分の名前や地理に歴史、世界情勢については明瞭に覚えている。

他にも銃火器や刀剣の扱いに逮捕術や合気道、生きていく上で役立つサバイバルスキルなど、子供の生活とは不釣り合いな情報が知識として残っていた。

どうしてこうなったかは不明だ。

最近有名になってきた革命軍に英才教育を仕込まれた子供スパイだったのかもしれない。

スパイか……ピンとこないけど、情報戦線において有効な手段の一つである事は確かだ。でも俺はヒーローの方が良い。

五年前、記憶を一部喪失状態で目覚めた俺は、板きれに掴まったまま海を漂流していた。おそらく乗っていた船が大破したんだと思う。原因は色々考えられるから逆に解らない。

怪我はなかったけど、飢えと渴きがヤバかった。しかも全く力が入らない。それでも見苦しいまでに必死に、板きれにしがみつくしかなかった。

うん、それはそうだよね。だって俺——悪魔の実の能力者だもん。覚えてないのに知っているとするのは不思議な感覚で、害はないけど未だに馴染まない。

でも溺れ死ぬかもしれないって状況下で、藁をも掴むのは人情ってものだろう。何ら恥ずべき行為ではない。

当然のように俺は生に執着し、もがき、あがき、くらいついた結果、運命の出会いによって命を救われた。

運命と言うと大袈裟に思えるかもしれないが、決して言い過ぎだとは思わない。

九死に一生を得て判った事、それは子供の俺はまだまだ弱いつて

事。それなのに大人顔負けの知識や強さを持っている異質な存分でもあるって事。

おお、ワケありって感じのヒーローっぽくていいかも。

体は子供、中身は大人のな……

閑話休題

そんなこんなで俺は今ドラム王国に来ている。

冬島のドラム王国は寒冷気候の島国だから、万年雪化粧をして正に絶景という形容詞が相応しい。

日常生活においては何かとご苦労も多いだろうけど、人間の適応能力の高さには舌を巻くばかりだ。

上陸した時はあまりの寒さに景観を楽しむ余裕なんてなかったけど、舞い散る雪がとても美しく心が和む。

実は世話になっていている村の猟師が気になる事を言っていた。森の奥深くに怪物が現れて犠牲者も出たとか……。

俺がこの村に滞在している理由は、ある人の帰りを待っているからだが、かれこれ一週間は経つ。

一日中村に留まって待つのも流石に飽きてきた。

その怪物に興味が湧いたし、害獣であれば討伐すべきだろう。

受けた恩を返す事は、人として当たり前の行為だ。

悪の怪物を退治するのもヒーローの役目だし、ここは俺が行くつきやない。

危険だの子供が無茶だのと騒ぐ村人の制止を振り切り、我を押し通して雪に埋もれた森へと踏み入る。

心配してくれるのは嬉しいが、勝てないと思われているなら心外だ。

何度も言うが、俺はヒーローだから大人より強いし、悪の怪物なんかに負けるはずもない。

それにいきなり出現したって所が気になる。

万が一“悪魔の卵”が関係していたら、俺が対処すべき最優先事案

だ。

小走りで駆け始めて三時間、俺の小走りは並の大人の全力疾走より遙かに速い。従ってかなり森の奥深くまで来ていた。

樹々には縄張りを示すであろう爪痕が真新しくつけられている。雄に二メートルを超す高さにあるそれは、相手が如何に巨大であるかを物語っていた。

猟銃を持った狩人でさえ畏れるほどの怪物だ、俺にとっても「当たり」である可能性は低くない。

気配を殺し、息を潜め、慎重な足取りで歩を進める。

警告とも思える爪痕の数々を辿り、ついに俺は目当ての怪物を発見した。

薄汚れた濃灰色の毛並みと異様に発達した長く鋭い爪、熊よりも遙かに大きい巨軀には多くの古傷が見られる。

ドラムという土地柄からラパーンだと思うが、知識として知る外見とは似ても似つかない。

二足歩行する凶暴な肉食獣である雪ウサギ——それがラパーンだ。

「……これは!? 悪魔の卵の波動か。偶発的にしろ、作為的にしろ、変異が進んでいるな、さしずめラパーン亜種と言ったところか」

全身には大小無数の傷痕が見てとれる。片耳は千切れ、もう片方も上半分がない。特殊な個体であるが故に群れには馴染めず、相当な苦勞をして生きてきた事が容易に窺い知れた。

何より目立つのは右肩に寄生する悪魔の卵、特異に発達した右腕が禍々しく脈打つ。

まだ理性は残っているように見えるが、覇気は感じられない。

「そうか、お前は、巡り合えなかつたんだな。死に場所を求めてここに来たのか?」

悪魔の卵の影響で変異し、異端として除け者にされ、理解される事なく生きる。想像を絶するような修羅場をくぐってきたに違いない。

信じられるのは己のみ……いや、己自身さえ忌み嫌っているのではないだろうか?

眉間についた一際大きな傷痕は、まるで己を否定する事であった自傷痕に思えた。

山頂からの吹き下ろし風が止み、ラパーン亜種が鼻をひくつかせる。どうやら不穏な匂いを察したようだ。瞬時に臨戦体勢を取り、周囲を警戒し出した。

ラパーン亜種が獯猛な唸り声と激しい敵意を放つ。

「ガルルルウウ」

近付けば殺す、そう言う意思表示だろう。

悪魔の卵のせいで人を襲い喰らう怪物に成り下がったが、わずかな理性が自然の摂理に倣おうとしている。

おそらく俺が逃げ出せば、追っては来ないだろう。

嫌いじゃない、むしろ武人然とした態度に敬意すら抱く。

殺してしまうのは忍びないが、悪魔の卵に寄生されたら救いようはない。少しでも苦しみが無いよう屠る、それが俺にできる唯一の救援だろう。

俺は一瞬でも考えてしまった傲慢さを払うかのように首を振った。

改めて悪魔の卵に支配されたラパーン亜種と向き合う。

お前も苦しんできたんだろう、色々と事情があるのだろうが、俺にも曲げられぬ信念がある。

「恨みはない。謝りもしない。いぎ、尋常に——勝負ッ！」

野生動物を相手に殺しても殺されても恨みっこ無しだと伝える事に意味はない。伝えるまでもなく、本能で理解しているからだ。それでも尚、伝えたかった。

前口上を終えるや否や、ラパーン亜種を殴りつけた。

覇気を纏わぬ拳は分厚い脂肪と筋肉の鎧を貫くには至らず、ラパーン亜種はたたらを踏んで留まる。

最初から仕留めにかからないのは、正々堂々ありたいという俺の意思表示だ。例え伝わらなくても示す事に意味がある。喧嘩上等、エゴで結構。

ラパーン亜種の強靱な脚力は環境の不利をもとせず、まるで地面が爆ぜたような錯覚と共に一瞬で距離を縮めてくる。

空気すら切り裂きそうな前脚による連撃を紙一重でかわす。しかしながら悪魔の卵で変異した右手だけは、空を裂き、掠めただけで鮮血を舞い上げた。

「うおっ、想像以上に速いな」

ラパーン亜種と違って俺は雪面での戦闘に慣れていない。まともに受ければ衝撃を流しきれないだろう。

ひとまず回避に専念し、眼前に迫る巨大な爪を辛うじていなす。

「虚実はないけど、一発一発が異常なほど重いな」

いなした腕が軽く痺れる。

大木を容易くへし折る一撃だ、当たらずとも体力と精神力を使う。

「……まだ速くなるのか」

ラパーン亜種の連打スピードが益々速くなった。

肌を掠める回数も増え、徐々に捌き切れなくなっていく。

ヤバイ……こいつは、ヤバイな。

重みのある連打が次第に速さを増し、回転数も上がってきた。

速さを意識した攻撃に切り替えてきたか。

その上で致命の威力も残している。

こんなヤバイウサギがいたなんて……。

「ハ、ハハハッ！ いいね!!」

自然と笑いが込み上げて来た。と同時に激しい衝撃が襲う。

ラパーン亜種の一撃をモロに食らい、受け身も取れずに吹き飛ばされてしまったからだ。

バラバラになりそうな痛みより、歓喜のパルスが全身を走る。

「……よし、だいたい解った」

仕留めたと思った俺が即立ち上がったせいで、ラパーン亜種はいつそう警戒心を強め、そのままの距離を保っている。

「ふう、やはり実戦に勝る修行はないな」

受け売りではあるが、本当にそう思えた。

討伐という当初の目的を忘れ、思う存分拳を交えたくなる衝動を抑え、俺はゆつくりと両手両足に巻き付けてある重りのアタッチメント

を外す。

一つ一つが俺の体重以上であり、それが四つドサツと雪面に落ちた。

久々に解放された体は綿のように軽い。

「もつと興じていたいが、ライオンはウサギを捕らえるにも全力を尽くすという——獅子搏兔、俺の本気を見せてやるよ」

やるからには出し惜しみはなしだ。

悪魔の卵を回収するために、悪魔の実の能力も解放する。

覇気も存分に練り上げて両腕に纏う。

悪魔の実の力で俺も異形へと姿を変えた。その変化にラパーン亜種は驚きを隠せないようだ。気持ちは解る。俺も初めて見た時は、鏡の中に化け物があると慌てたもんだ。

ラパーン亜種は震えていた。本能が恐怖を感じるのだろう。

「強きウサギよ。お前の求めるものは、ここにがあるぞ！」

そう叫んだ。なぜだか伝わる気がした。

後退りしていたラパーン亜種の歩みが止まり、奴は再び突進してきた。

先ほどとは異なり、俺は十分な間合いで攻撃を回避する。重りを外したおかげで、今は余裕を持って対処出来ている。

俺はラパーン亜種の懐に潜ると、武装色で硬化させた手刀をお見舞いした。分厚い筋肉の鎧をあっさり突き破り、その一撃は心臓に達する。

おびただしい量の出血が俺を紅く染め、やがて巨体がぐらりと揺れ、ラパーン亜種は永遠の眠りについた。

俺は拍手をもってラパーン亜種の御霊を送る。

その存在と出会いに感謝し、手を合わせる事で礼と為す。

ラパーン亜種は確かに強かった。

しかしながら悪魔の卵を十全には使いこなせておらず、我を貫き通すには力量不足だったと言える。

技の一つも使う事なく、スペック差によるゴリ押しで勝ててしまったのだから……

「お前の死は俺を更に強くするだろう。俺の中で血肉となって供に生きろ」

そういうや、俺は異形の左手でラパーン亜種に寄生する悪魔の卵に触れ、肩肉ごと喰らい尽くす。

ドクンという鼓動が聞こえ、数秒後に力が漲ってきた。

「これで3つ目か」

悪魔の卵を吸収するたびに得る力は、俺に仮初めの全能感を与えてくれる。力こそ全てであり、その全てを支配しろと、内なる悪魔が囁く。

三度目でも未だにこの感覚には慣れない。

俺は昂る心を鎮めようと目を閉じ、深く息を吐いた。

自然と一体化するが如く、緩やかに気を練る。

落ち着きを取り戻した頃には、頭や肩にはかなりの雪が積もっていた。パパッと雪を払いのけ、外した重りを再度装着する。

「……やっぱり軽く感じるな」

パワーアップの恩恵を体感するが、調子に乗ってはいけない。世の中上には上がいるのだから。

討伐の証となる毛皮や爪を持って、俺は意気揚々と帰路につく。土産話も手土産もたつぷりある。

村まで残り半分に差し掛かった折、上空より飛来する圧倒的な覇気を感じた。

ラパーン亜種など比べ物にならない程の存在感、俺より格上である事に疑問の余地もない。

「アモーンッ!!」

咄嗟に飛び退いたおかげで、直撃を避ける事には成功したが、衝撃で吹き飛ばされた。

飛来物が落下した場所は半径二十メートルはあるクレーターが出来ている。

その中心には鬼の形相をした壮年の男が一人――

「かああああっ！ 答えろ、アモン!!」

俺の知る限り最強の雄にして、俺の知る限り最高の漢である。

他の誰でもない、敬愛して止まない俺の師匠だ。

手土産も捨て置き、師匠の下へと駆け寄る。

「師匠ーッ！」

「流派!! 東方不敗は?!」

「王者の風よ!」

師匠の突き出した拳に、俺も拳で応える。

「全新?」

「系裂!!」

繰り出される無数の拳を捌き

「天破侠乱!!」

加速する拳をひたすら捌く。

「見よ! 東方は紅く燃えている!!」

最後に師匠と俺の拳がぶつかり、衝撃波が周囲の雪まで凧ぎ払う。

他人が見るとただの殴り合いに思いかもしれないけど、これが師匠の完成させた流派東方不敗の担い手同士の挨拶だ。

滾る拳を交える度に、俺の心は熱くなる。

久しぶりの再会に喜ぶ俺とは逆に師匠は怒っていた。

「このバカ弟子がッ!」

覇気を纏った拳骨が脳天に炸裂し、激痛と目眩で頭を抱える。

「痛ッ……し、師匠、何を」

「ワシは村で待てと言ったはず、言い付け一つ守れん愚か者への仕置きじゃ」

「で、でも村の人が困っていたから」

「そう、村の者達は困っておったぞ」

「だから俺が何とかしようと」

「まだ解らぬか、バカ者! その村人が血眼でお前を探しておったのだぞー!」

「えっ!?!」

「困っている村人を助けようとしたお前が、村人を困らせたとあって

は本末転倒と言うもの。やり方はいくらでもあつただろうに、まだまだ未熟よな」

「……」

言葉がなかった。

心配事を取り除こうとして、逆に心配事を増やしてたなんて……何より言われるまで気付けなかった事が情けない。

村人の事を考えてたつもりが、結局は自分の事しか考えてなかったんだ。否定したいけど心当たりがあり過ぎる。当たりがどうかか思ってたもんな……うう、恥ずかしい。

「しかしな、義を見てせざるは勇無きなり。お前は未熟だが、臆病ではない。やってしまった事を悔いても始まらない。まずは一刻も早く元気な姿を見せて、村人を安心させてやれ」

師匠の手が頭に触れた。

痛みがスツと薄れていく、文字通りの手当てだ。

「は、はい！　ありがとうございます！　師匠ツ!!」

師匠の一言一言で一喜一憂してしまう俺。

平常心こそが重要なのに、まだまだ修行が足りないな。

「良き相手にも恵まれたようだな。覇気が以前より上がってる」
そう言いながら師匠は俺の頭を撫でてくれる。

少し照れくさいけど、嫌じゃない。

「そ、それで師匠、古いご友人にはお会い出来たのですか？」

気恥ずかしさから、俺は慌てて話題を変えた。

今回の置いてきぼりも師匠が秘密裏に人と会う為だったし、年に一度は必ずドラムを訪れている。

弟子にも会わせてくれないのは正直寂しいし、ちよつとだけ腹も立つけど、我が儘を言って師匠を困らせる事はしたくない。

まあドラムまで無理矢理着いて来てる時点で……あつ、そう言う意味か。

うーん、どうやら俺は現在進行形で師匠を困らせ続けてるみたいだ。

チラツと師匠の顔を見るが、先ほどの鬼の形相はしていない。

ホッと胸を撫で下ろす。

「うむ。昔話に酒が進んでな。つい長居してしまったようだ、許せ」

「いえ、俺は別に……」

寂しくなかったと言えば嘘になる。

年々師匠がドラムを訪れてる間隔が短くなってきているせいか、俺は知らず知らずの内に自分本位な考えをしてしまっていた。

師匠に拾われてから、もう五年になる。

当時の記憶はひどく曖昧で、覚えているのはカームベルトという無風海域で漂流していた事、悪魔の实の能力者だから溺れかけてた事、そんな俺を師匠が助けてくれた事くらいだ。

師匠がいなかったら間違いなく俺は死んでいた。

軍艦よりデカイ海王類をワンパンで倒す師匠は、俺の憧れるヒーローそのものだった。

師匠は流浪の武闘家で同姓の縁もあって、身寄りの当ても記憶もない俺を弟子にしてくれた。

俺の人生は師匠との出会いから始まったと言っても過言じゃない。

師匠は世界最強の男だ。

その名は東方不敗、マスターアジア！

本名のクロス・シュウジより東方不敗の方が世の中に浸透している。

その名の示す通り、流派立ち上げ後は負け知らず。

決着がつかずに引き分けた人もいたらしいけど、不敗である事に変わりはない。

師匠は俺のヒーローだ。

ヒーローが負けたら世界は悪の手に渡ってしまう。

そんな事は師匠が、そしてこの俺が許さない。

俺も師匠のおかげで強くなったし、この先まだまだ強くなる予定だ。

その為にも「悪魔の卵」がいる。

俺の食べた悪魔の实——デビデビの实、ゾオン系幻獣種モデル：魔

王（ルシファア）。

世界中を旅してゐる師匠でも存在すら聞いた事がなく、どんな文献にも記されていない悪魔の実、それなのにまた例の如く俺だけは知っていた。